

## ユタと寺

佐々木 佳子

### 1. はじめに

沖縄には「ユタ」という神を自らの体に憑依させ、神の言葉を語るとされている民間巫女が存在する。ユタになるまでの過程を成巫儀礼と言い、ユタになるとされた者はカンダーリィという心身の異常を体験し、長年にわたり苦しみながらユタになっていくのである。私は沖縄での調査テーマを決める段階でこの成巫儀礼に興味を持ち、それを調査テーマとした。実際に沖縄では盛光寺というお寺の住職さんから知り合いのユタの方を紹介いただき、一人のユタに話を聞くことができた。

また、祖父が寺の住職である私は、この盛光寺の住職さんとの出会いによって沖縄の寺についても関心を抱き、寺とユタとの関係や沖縄と本土の寺の違いについても考察することができた。よって本稿では「ユタと寺」と題して論を展開していく。

### 2. ユタの一生

#### 2.1 ユタ

ユタは民俗信仰の担い手として、古くから先祖崇拜の強い沖縄社会を形成してきた民間の巫女である。霊的能力によりシャーマンとして人々の宗教生活に関わる。ユタのほとんどは女性であり、個人的な相談内容に対して占いや祈祷、アドバイスなどを行って生計を立てている。

仕事内容の例としては、運勢や吉凶の判断、家や墓の新改築の是非や日取りの判断、病気や災いが生じたときの超自然的な原因の追究、死者や祖霊からのメッセージを感受して伝えることなどが挙げられる。特に原因不明の病気や不幸になった場合にユタの判断を仰ぐ沖縄人は多く、この行為は「ユタ買い」と呼ばれている。医者がユタを勧める例もあり、沖縄には古くから「医者半分、ユタ半分」ということわざもある。

また、一方でユタはこれまでの沖縄の歴史の中で幾度も弾圧を受けている。中央集権や体制強化を進めたい支配階層は、日常的に人々と神を親しくするユタの存在を脅威と捉えることが多かったのである。そのため、時代時代の権力層から「後進的な存在であり、世間を惑わす」として弾圧、摘発を受けてきた。明治期の自治体レベルでのユタ禁止令、大正時代初期の「ユタ征伐」、昭和10年代の戦時体制下の「ユタ狩り」などが例に挙げられる。このようなユタの



写真1 弁財天堂(首里)でのユタと依頼者

弾圧はいずれも、沖縄が日本社会へと同化していく過程で行われた政策である。社会が変化し、不安定な時期には、良くも悪くもユタの存在がクローズアップされ、トラブルの火種となった。今もなお、ユタの社会的立場は安泰とは言えない。さらに、ユタの能力を裏付ける科学的根拠はないため、ユタと偽って金儲けする者が現在も後を絶たない。

しかし、過去これほどまでに弾圧、規制を受けてもなお、沖縄の社会に根付いているユタ信仰は、現在でも沖縄人の精神的よりどころのひとつとしてなくてはならない存在であると言える。

## 2.2 成巫儀礼

成巫儀礼とはユタになるまでの過程である。ユタになるとされたものは、生死に関わる事故、肉親の不幸、夢などをきっかけに「カンダーリィ(神倒れ・神垂れ)」と言われる原因不明の体調不良を煩う。これを巫病と言い、ユタになることを受け入れると解放される。

ここで一般的な成巫儀礼を紹介する。まず、ユタになる者は幼少時代に人の靈魂や夢の中に神の姿を見るなどの体験をする。そして年頃になるとあることをきっかけに頭痛・不眠などの様々な病気にかかる。ただの体調不良だと思って医者にかかっても治らず、ユタに相談して病気の原因を占ってもらうと、原因は神を拝むようにという神からの知らせ(巫病)であると判断される。ここでカンダーリィになっていたことが判明し、自分の拝むべき神を確認するための様々な儀礼を行う。一般的にこの儀礼はユタとともに行う場合が多い。この儀礼によって成巫し、巫病が治っていくとされている。この儀礼をしない限り、巫病は治らず、死に至る者もいる。この巫病期間は個人的に差異があるが、長いものは20年あまりから、短いものは2、3年という(山下1983)。

## 2.3 ユタになるまで 泉さんの一生

ユタである泉美代子さんは、那覇市首里儀保町にある盛光寺の住職さんに紹介していただいた。泉さんは現在69歳で、首里出身で現在も首里で暮らしている。泉さんは、「ユタ」を職業としていないため、このような研究の調査などはいつも断っているらしいのだが、今回は特別にご協力していただいた。

泉さんの異常体験は、3～4歳の頃から始まった。当時から神の声を聞いたり、神の姿を見たりなどの体験をしていた。しかし、泉さんが結婚して5人の子どもが生まれるまでの約30年間は何の異変も起きず、空白の時間が過ぎていった。それは、子どもの異変に気づき、ユタになるのだろうと察知した泉さんの母親が、祖先に「この子が結婚して、生まれた子どもが成長するまでそっとしておいてくれ」とお願いしていたためであった。また、泉さんの祖母も神の声が聞こえる能力を持っていたらしい。このような能力が祖母から孫に受け継がれる例はよくあり、これを「チヂウリ」と呼

ぶ。

そうして5人目の子どもが生まれ、35歳の時ついに泉さんのカンダーリィが始まった。当時泉さんは食堂で働いていたのだが、突然料理の味付けができなくなった。それと同時に家事もできなくなり、夫が全て泉さんの代わりに家事を行うようになった。何ひとつ手に付かない状況が続く、その後ユタに会いに行く。泉さんは特定のユタではなく、カンダーリィの間たくさんユタに会ったそうだ。昼間はユタに連れられ御嶽などの拝所巡りをし、夜は寝ている間に祖先に呼ばれ、無意識のまま墓の前や御嶽に連れて行かれた。布団に入って寝ていると祖先に足を蹴られ、起きて見てみると黒くあざができていたこともあったようだ。自分がユタになるためのカンダーリィの状態であることを夫にも子どもにも誰にも言わなかったため、昼も夜も外に出て行く妻を夫は不信に思い、男と会っているのではないのかと誤解するようになった。泉さんが家を出ようとする、それを止めようとする夫に殴られるという日々が続き、泉さんの歯はその時全て抜けてしまったそうだ。また、ある一人のユタに3時間岩の上に正座をさせられた時のせいで足が悪くなり、現在も足が不自由である。

たくさんのユタに会ったことで出費はかさみ、泉家の財産で借金もしてしまった。この全財産を使うほど金を消費してしまうカンダーリィを金(ジン)ダーリィというそうだ。これは泉さんから教えていただいたことなのだが、カンダーリィには3つの種類があり、他に酒に溺れてしまう酒(サキ)ダーリィと、見る人見る人に恋をしてしまう恋(クイ)ダーリィがある。

たくさんのユタと会い様々な儀礼を行ってようやくユタになることを受け入れると、体調は回復し始め、カンダーリィは次第に消えていった。カンダーリィは約20年もの間、泉さんを苦しめた。その後、夫と子どもに自分がカンダーリィであったこと、そしてユタになったことを伝えた。

泉さんは、神の声が聞こえることを一般のユタのように職業にしておらず、今は親戚や友人の依頼しか受けていない。始めの頃は「ユタ」という商売をしたくなくて、依頼者が来ても断っていた。しかし、そうすると祖先から「あなたはそういう役目を担うためにユタのような特質を持たされたのだから、しっかり引き受けなさい。」と告げられ、引き受けなければ具合が悪くなり、一日中寝込んでしまっていたそうだ。

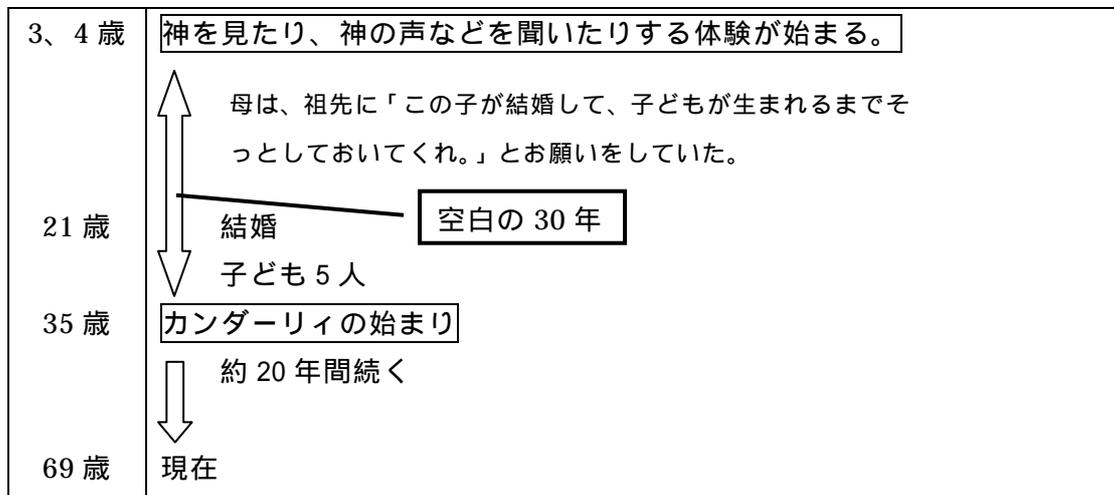
この泉さんの一生を聞き終え、私は「ここまで辛い思いをしてユタになったことを今はどう感じているか」という質問をした。すると泉さんは笑顔で、「今はとても幸せ。友人や親戚たちを助けてあげることができて嬉しい。夫は亭主関白な人だったが、これをきっかけに今も家事を手伝ってくれているし、私と離婚しないでくれただけでもありがたい。家族には本当に支えられたので、感謝の気持



写真2 泉美代子さん(写真右)

ちでいっぱい」とおっしゃっていた。その言葉を聞いて私も思わず笑顔がこぼれた。

表1 泉さんの一生



### 3 . 沖縄の先祖崇拜

「ユタ」という民俗信仰から見られるように沖縄人は先祖崇拜の意識が高い。現在、日本全土にはほとんど残っていない古代日本の「神ながらの道」を忠実に残しているのが沖縄県の習俗・習慣であり、今日もなお県民の生活と密着し、日常生活の中で「神」に対する信仰と祈願が行われている。

例えば、沖縄の各地域には、必ず「御嶽（ウタキ）」と呼ばれる拝所がある。それらは質素な小屋風なものもあるが、大半は自然の木や石や岩が組み合わさった場所で、質素な香炉が置かれているだけであり、そこには古代日本の信仰の原点が見出せる。拝所の密度は、本土のそれよりはるかに濃い。沖縄には、神社は数えるほどしかなく、現在なおほとんどが古代の神ながらの拝所をとどめている（写真3・4）。



写真3 首里にある西森御嶽



写真4 香炉

また、沖縄に仏教が伝わったのは 13 世紀であり、本土への仏教の伝播が 6 世紀中頃ということ考えると、沖縄が長く仏教思想の影響なしに古代日本人の持っていた

「神ながら」の思想をはぐくんでいたということになる。古い日本のよさを最も色濃く残している沖縄が、今の私たちに日本人の信仰の原点というべきものを教えてくれるのだ。沖縄は遠い島だが、私たち日本人の先祖に最も近い島であるということが出来る（住友 1989）。

その沖縄人の先祖に対する濃い意識の表れが見て取れ、盛光寺も関わっている首里地域での古くからの風習「首里十二カ所巡り」を以下で説明する。

#### 4. ヌタが来る寺

私が泉さんを紹介していただいた盛光寺にはヌタが頻繁に参拝に来る。なぜ寺にヌタがやってくるのか、それはこの首里地域の昔からの風習「首里十二カ所巡り」に関係していた。

##### 4.1 首里十二カ所巡り

那覇市首里地域では古くから、「首里十二カ所巡り」と呼ばれる、首里にある4つの寺院に奉られている十二支の守り本尊を巡拝するという行事・風習が存在する。家族の干支の守り本尊だけを祈願する参拝者もいれば、十二支全てを廻る参拝者もいる。本尊と干支の関係は次の通りである。子は千手観音菩薩、丑・寅は虚空蔵菩薩、卯は文殊菩薩、辰・巳は普賢菩薩、午は勢至菩薩、未・申は大日如来、酉は不動明王、戌・亥は阿弥陀如来となっている。現在これらの諸仏が安置されている寺院は、千手観音菩薩・虚空蔵菩薩・勢至菩薩・普賢菩薩が首里観音堂、不動明王が安国寺、阿弥陀如来と文殊菩薩が達磨寺、大日如来が盛光寺である（表2）。

表2 参拝寺と十二支と守り本尊

参拝寺	十二支	守り本尊
首里観音堂	子	千手観音
	丑・寅	虚空蔵菩薩
	辰・巳	普賢菩薩
	午	勢至菩薩
安国寺	酉	不動明王
達磨寺	戌・亥	阿弥陀如来
	卯	文殊菩薩
盛光寺	未・申	大日如来

#### 4.2 首里十二カ所巡りとユタ

首里十二カ所巡りの近年の特徴は、参拝者がユタを伴っている場合が多いということだ。戦前の首里十二カ所巡りは、毎年家族の守り本尊にだけ参り冥福を祈るものであった。その中心的寺院は円覚寺で、文殊菩薩・普賢菩薩・虚空蔵菩薩・勢至菩薩を安置していた。しかし、戦時中に倒壊した円覚寺は戦後再建されず、虚空蔵菩薩・勢至菩薩は首里観音堂で新像が造られ、文殊菩薩・普賢菩薩は万松院にあった。その万松院が平成2(1990)年首里十二カ所巡りの機能を返上したため、文殊菩薩は首里観音堂へ、普賢菩薩は達磨寺へ移り、現在に至っている。戦後、首里十二カ所巡りは復興するが、これにユタが深く関与し民間宗教に仏教の守り本尊が取り入れられ、各寺院を巡拝する習俗が定着していった。

首里十二カ所巡りの参拝者は1人から数人が多く、集団での参拝はほとんどない。持参している供え物は、ビンシー、果物や菓子、ウチカミ(紙銭)などで、ビンシーとは徳利(とっくり)、線香、杯、酒、米、塩などが入っている木箱のことである。盛光寺の本堂内には各机の上に酒入れのビンとお米入れの箱が備えつけられており、参拝者は持ってきた酒と米をそれらに入れる(写真5)。

定例の参拝は旧暦の正月(初御願)・5月・9月・12月と決まっているのだが、それに関係なく寺院は他の月日にも多数の参拝者でにぎわっており(写真6)、首里十二カ所巡りの目的の広がりやユタが関与する習俗としての浸透が見て取れる。



写真5 盛光寺本堂にあるお米入れと酒入れ



写真6 盛光寺本堂での参拝者

### 5. 沖縄の仏教

#### 5.1 檀家制度

盛光寺の住職さんから寺についての話を伺って一番驚いたのが、「沖縄には檀家制度がない」ということであった。寺の孫娘の私としては、檀家という言葉は聞き慣れた言葉であり、寺に檀家というものはつきものであると思っていた。檀家制度の有無により、寺の役割や在り方に相当な違いが出てくる。

「檀家」とはある特定の寺に所属し、そこに先祖代々の墓を置いている家のことである。私の祖父が経営する寺には、現在檀家が120~130件ほどあり、お盆や春・秋

の彼岸などは、墓参りに来る参拝者で大忙しである。また、檀家の葬式や法事などで休日はほとんどない。

檀家制度は、江戸時代のバテレン追放令(1637~1638)をきっかけに始まった制度である。目的は日本を儒教国にし、キリスト教や仏教が広まらないようにするために寺を政治の機構に組み入れ、仏教の布教活動をさせずに、国民管理の実務とキリシタンの監視に専念させることであった。国民全てを寺の管理下に置き、寺に証明や許認可の業務をやらせ、今の役所の戸籍課、住民課のような仕事をさせながら、一般人の葬式までやらせた。つまり、寺に仏教とまるで関係のない業務に専念させながら、民衆の生活を見張らせ、キリシタンをあぶり出そうとしたのである。この檀家制度は江戸幕府の命令で作られたもので、幕府が消滅し明治時代になるとキリシタンの禁制も解かれたため、廃止された。廃止された時点で檀家制度の本来の意味は消えるのだが、江戸時代長期に渡って実施され社会に浸透していた檀家制度は、すでにしっかりとした社会制度として確立していた。現在は檀家制度に代わるものがないため、今もそのままほとんどの人々が寺に所属し、その寺の墓に入ることが当然というほどまでにその風潮が残っている。

## 5.2 檀家制度がない理由

ではなぜ沖縄には檀家制度がないのだろうか。生きている自分たちを守ってくれるのは先祖だと固く信じているので、そもそも仏教やキリスト教などに対する信仰はなく、それらはあまり浸透していない。

かつて琉球国時代は沖縄も仏教国であり、仏教は護国宗教として重んじられていた。しかし、慶長の役(1609)で沖縄が薩摩の支配下に置かれると、禁教令が出され、沖縄の仏教は厳しい弾圧を受けた。バテレン追放令(1637~1638)をきっかけに幕府が檀家制度によって寺に民衆の監視を命じても、薩摩藩はその命令に従わず、沖縄の寺院経済はどんどん疲弊していった。よって、仏教は民衆の生活意識を根底まで変革することなく、むしろ固有の信仰と習合または共存しつつ、盆、彼岸、寺拝み、首里十二カ所巡りなどの行事の中に埋没した。僧侶は葬儀の法要に应ずるのみ、寺院もまた沖縄固有の神拝み(分家が総本家の火の神を拝み、ついでにその村のお岳、その他の拝所も拝むこと)に類する婦女子の礼拝の対象にすぎなくなった(湧上・山下1974)。このように仏教やキリスト教は民衆の信仰に影響を与えることなく、それにユタという民俗信仰も影響してさらに先祖崇拜の意識が強い沖縄が形成されていったのである。

## 5.3 沖縄の寺

檀家制度がないことで、寺の在り方が本土とかなり違って来る。

まず、檀家制度のない沖縄では自分の先祖の墓はどこに建てても自由であるため、寺の敷地内には墓は存在しない。そのため、敷地内で檀家の墓を管理し、所有する本土と比べると、敷地面積は小さい(写真7・8)。

また、本土の寺の経営は檀家あってのものである。檀家の葬式や法事など、一年中仕事が途切れることはない。しかし、檀家がない沖縄の寺は、収入がほとんどない。首里十二カ所巡りに属している盛光寺は、参拝者が多数訪れることもあり、比較的経営は安定しているが、他の寺は収入が少ないようだ。

本土では一年の中でお盆と彼岸が、墓参りに来る檀家で一番忙しいが、墓を所有しない沖縄の寺はそれにもあまり関係はない。沖縄の寺への参拝者にほとんどは先祖供養のためにユタに言われてという人がほとんどだそうだ。



写真7 盛光寺



写真8 私の祖父の寺 相川寺  
(秋田市雄和)

#### 5.4 檀家制度の問題点から見る沖縄の仏教

先ほども述べたように、本土の寺の経営は檀家あってのもの。江戸時代からこれまで寺と地域住民との関係を維持している檀家制度だが、寺と檀家との間で金銭面や信用面での問題も多々生じてしまうことは避けて通れないことである。実際に私の祖父や祖母も檀家とのコミュニケーションに頭を抱えている。

また、寺と檀家の間で毎年繰り返される宗教儀式を続けていくうちに、仏教信者である本来の心を忘れ、仏教の教えに対する興味を失ってしまいがちになる。寺を訪れるのは、決まって毎年お盆と春・夏の彼岸の墓参りだけというように仏教信仰が形式化してしまっているように思える。

それに対し、檀家制度がなく寺に所属していない沖縄の人々が、お寺に来る理由は純粋に先祖を供養したいからという気持ちがあるからである。自分の意志でお寺に行き、手を合わせ、日頃の感謝の気持ちを報告するのは、先祖崇拝の意識が高い沖縄だからこそその参拝であると言える。

#### 6. まとめ

ユタになるまでの過程は人それぞれだが、泉さんのお話を聞いて想像以上に辛く、苦しいものだった。本人自身だけではなく、もしかしたら家族やその周りの人までも辛い思いをさせてしまうかもしれない。泉さんは、カンダーリィの中で、夫に誤解させてしまったことが何よりも辛かったし、申しわけなかったとおっしゃってい

た。ユタになるのだというもう後戻りできない自分の人生を受け入れることには、計り知れない決断力と犠牲が必要なのだ。しかし、それを乗り越えるからこそ先祖に選ばれただけの人格が形成され、ユタになれるのだと感じた。

また、今回盛光寺を訪れたことで沖縄の仏教や寺も沖縄独特のものであると知った。盛光寺本堂内で見学をさせてもらっていたときに、住職さんをおある老人夫婦が訪ねて来ていた。夫婦には子供がなく、先祖代々受け継いできた家系をここで途切れさせてしまうことに悩み精神不安定になっている妻に、夫が仏教の教えを説いてほしいと住職さんの元を訪ねて来たのである。住職さんは本堂の奥に二人を座らせ、仏教の教えを説きながら励まし、最後にお経を読んだ。このような光景は、本来なら寺では当たり前のような光景なのかもしれないが、私の祖父の寺では見たことがなかった。このような相談者などは一切来ず、檀家はほとんどお盆や彼岸の墓参りのときだけにしか寺に来ない。本土の寺が形式化してきていることを改めて感じた出来事であった。

檀家制度のない沖縄だが、その方がより強い信仰心の表れが感じられ、純粹に先祖と向き合えると思う。今回の調査で、沖縄人の先祖を敬う気持ちの強さを肌で実感することができた。

#### 参考文献

- 下野敏見（1986）『ヤマト文化と琉球文化』PHP研究所  
住友方美（1989）『沖縄の御願の知識と実例』月刊沖縄社  
山下欣一（1983）「シャーマンの世界 南島のシャーマン」『日本民俗文化大系第4巻 神と仏 民俗宗教の諸相』小学館  
湧上元雄・山下欣一（1974）『沖縄・奄美の民間信仰』明玄書房

#### 参考ウェブサイト

- 「沖縄の仏壇と檀家」 <http://www.butsudan.kogeisha.com/main/essay/2007.01.html>  
「葬祭研究所」 <http://www.sousaiken.com/ssk/world/okinawa.html>  
「寺族研修会」 <http://www.hicat.ne.jp/home/junjo/2006-08-24.pdf#search>